

# 軽井沢伝説

避暑地・軽井沢に集った名士たちとの半世紀

## ☆ 出版記録



- ・ 著作者 犬丸 一郎
- ・ 発行者 持田 克己
- ・ 発行所 株式会社 講談社  
東京都文京区音羽 2-12-21
- ・ 出版部 TEL 03-5395-3783
- ・ 販売部 TEL 03-5395-4415 / 業務部 TEL 03-5395-3615
- ・ 初 版 2011年7月1日
- ・ 定 価 本体 1,600円 (税別)

## ☆ 著者略歴

- 1926年 東京・麹町に生まれる。
- 1949年 慶応義塾大学卒業後、帝国ホテル入社
- 1950年 米国留学  
(サンフランシスコ市立大学ホテル・レストラン科)  
(ニューヨーク州コーネル大学ホテル経営学部)
- 1953年 帰国しふたたび帝国ホテル勤務
- 1986年 帝国ホテル社長就任
- 1997年 帝国ホテル社長退任 (顧問就任)
- 1998年 軽井沢ゴルフ倶楽部理事長
- 1999年 帝国ホテル退社
- 2004年 軽井沢ゴルフ倶楽部理事長退任

## ☆ 目 次

まえがきにかえて

### 第一章 軽井沢ソサエティの絆

—— 「避暑地・軽井沢」の歴史を彩る人々

何が軽井沢を有名にしたか  
軽井沢との出会いは軍事教練  
進駐軍の司令官宅でバンド演奏  
「おい、早く別荘建てろ」  
南ヶ丘の“お隣さん”は白洲邸

週末は「経団連列車」で軽井沢へ  
軽井沢は「正妻の町」

## 第二章 別荘族の社交場

### —— 軽井沢万平ホテル

万平ホテルと帝国ホテル——老舗の「格式」  
軽井沢が被災しなかった理由  
ゴルフと蝶の蒐集に熱中した「お殿様」  
朝鮮特需でチップは日給の二倍に  
セレブが集まったダンスパーティの人気者  
プリンスのゴルフ場から「客層」が変わった  
国賓を泊めるホテルの条件

## 第三章 白洲次郎の息吹が聞こえる

### —— 軽井沢ゴルフ倶楽部

政財界人が憧れる「伝説のゴルフクラブ」  
いくらお金を積んでも入れない  
白洲次郎に怒鳴りつけられた元首相  
「名門」と「高級」の違い  
倶楽部の“プリンシプル”を伝える桜

## 第四章 吉川英治ファミリーの夏

### —— 文人たちの軽井沢

「丹羽学校」の文壇ゴルフ愛好家たち  
父・英治が見ないで買った軽井沢の家  
最愛の娘のために六〇代から始めたゴルフ  
軽井沢の誕生会と豪華ゴルフコンペ  
プレー中に垣間見える夫婦関係  
「おしどりゴルファー」だった父と母

## 第五章 「テニスコートの恋」の舞台

### —— 美智子さまと「軽井沢会」

美智子さまご成婚担当の美容室  
入会の条件は「品行方正で節操の人」

家族用テニスコート第一号は朝吹家  
皇太子殿下自ら運転してテニスコートへ  
両陛下のテニスのお相手は「貞子さん」

## 第六章 妻たちの軽井沢

—— 鹿島ノ森と南ヶ丘の日常

夫は知らない別荘住まいの苦勞  
軽井沢で花を買うようになるなんて  
大人と子供、別々の社会があるのが軽井沢

## 第七章 そして時は移りゆく

—— 別荘族の変遷

土地開発の波と去ってゆく友人たち  
軽井沢に“塀”を作った新住民  
「資本家」とは何か？

### ☆ 本文引用



「 帝国ホテルの職から退いて、気がつけばもう十二年にもなる。

・ ・ ・ ・ ・

時の流れるのは早いもので、私が夏の軽井沢を例年、訪れるようになってすでに半世紀もの年月が過ぎた。慣れ親しんだ軽井沢の地は、私にとって人生の一部であるといってもいいだろう。その私が、最近、折に触れて懐かしく思い出すのは昭和二〇年代後半の軽井沢であり、とりわけ、夏の夕暮れどきの小さな本通りの光景なのである。

・ ・ ・ ・ ・ 」

—— (まえがきにかえて) より抜粋 ——

### ☆ 本書に関して



本書は7章より構成されており、章の巻末には文中に登場した人物の経歴などが、紹介されている。その経歴を拝見すると、登場人物が果たした社会的役割や地位などを、確認する事が出来る。  
その偉大さに敬服するばかりだ。

著者の実父は、(帝国の犬丸か、犬丸の帝国か)と言われた犬丸徹三氏。実父は1910年に東京高等商業学校(現・一橋大学)を卒業後、世界各国で修業し、1919年

に副支配人として帝国ホテルへ入社した。

氏は永らく日本のホテル業界の推進役を務め、日本ホテル協会会長のほか日本高架電鉄社長を兼務し、羽田・浜松町間のモノレール開通に尽力した。

本書はタイトル通り軽井沢を愛した著者が、軽井沢で触れ合った人物を紹介しながら、軽井沢を紹介していく内容となっている。特に第三章では白洲次郎氏を紹介しており、読み進むと必然的に（軽井沢ゴルフ倶楽部）を、少しだけ理解する事が出来る。

当該倶楽部を物語るエピソードとしては、名物理事長である白洲氏に関するものが多い。例えば総理大臣就任前の田中角栄氏に対し、備え付けのタオル持ち出しを叱った話などである。

様々な逸話のある当該倶楽部だが、「ゴルフ倶楽部とは」と自問した時、その原点に通じるヒントを与えてくれている様にも思われる。

本書はゴルフをテーマとしたものではないものの、全体を通じあらゆる場面で、ゴルフに関する話題が出て来る。その様な意味合いも有り、敢えて紹介させて頂いた。

是非ご一読頂き、気品高いコミュニティの雰囲気、味わって頂ければと思う。

なお本書は品切れにつき、2022年10月26日時点で、重版未定との事。

2022年10月26日

文\_\_大野良夫

© Yoshio Oono

日本ゴルフジャーナリスト協会 会員